

研究主題

「自分の語彙を豊かにし、
言葉がもつよさを知るとともに、言語感覚を高めることができる児童の育成
—語彙に対する学習意欲を高める指導の工夫を通して—」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
清瀬市立芝山小学校 主任教諭 小林 純一

第1 研究のねらい

「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説国語編」では、「中央教育審議会答申において、『小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある』と指摘されているように、語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。このため、語彙を豊かにする指導の改善・充実を図っている。」とある。

また、「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説総則編」では、児童の言語環境を整えることの重要性について言及している。さらに、「国語力を身に付けるための国語教育の在り方（文化庁）」においては、学校教育だけでなく、社会全体で子供を取り巻く言語環境を適切なものにしていくことの重要性を示している。

そこで本研究では、一人1台の学習者用端末等を活用した協働的な学びを通して、語彙に対する興味・関心をもたせ、学習意欲を高めることで、児童が、主体的に語彙を豊かにしようとするとともに、言葉がもつよさを認識して、言語感覚を高めることをねらいとする。

第2 研究仮説

一人1台の学習者用端末等を活用した協働的な学びを行い、語彙に対する興味・関心をもたせ、学習意欲を高めれば、児童は、主体的に語彙を豊かにし、言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を高めることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 語彙力に関する資料や先行研究の調査
- (2) 学習意欲とモチベーションに関する資料や先行研究の調査
- (3) 主体的な学びに関する資料や先行研究の調査
- (4) コーチングとファシリテーションに関する資料や先行研究の調査

2 調査研究

令和5年10月都内公立小学校の教員（97人）と都内公立小学校第5学年児童（46人）を対象に4件法による質問紙調査を行った。

教員を対象にした児童の語彙についての調査では、「現在指導に当たっている児童の語彙力は十分だと感じているか。」の質問に対して57%の教員が「感じない」、32%の教員が「どちらかといえば感じない」と回答しており、約9割の教員が児童の語彙力に課題意識をもっている

ことが分かった。

また、「語彙力向上には、授業時以外にも児童の主体的な学びが必要だと思うか。」という質問に対しては、73%の教員が「思う」、27%の教員が「どちらかといえば思う」と回答しており、回答した全教員が語彙力の向上には、授業時以外にも児童が自らすすんで取り組むことができるような語彙指導の環境整備が必要と感じていることが分かった。

一方、児童を対象にした調査では、「言葉を覚えるために自主的（学校から与えられた宿題や課題以外）に何かしているか。」という質問に対して、13%の児童が「している」、39%の児童が「どちらかといえばしている」と回答しており、言葉を覚えるために自主的な取組を行っている児童は、約5割に留まっていることが分かった。

これらの調査結果から、児童が主体的に語彙を豊かにしていくためには、語彙に対する学習意欲が高まるような言語環境を整えるとともに、言語活動を設定していく必要があると考えた。

3 開発研究

(1) 語彙を豊かにするための工夫

ア デジタルワークシートの共有

授業で扱うワークシートを全てデジタル化し、一人1台の学習者用端末を使って、いつでも友達ワークシートを見ることができるようにした。友達の考えを参考にできるようにしたことで、参照した分だけ多様な表現に触れられる機会を作った。また、ワークシートを共有することで、授業中はもちろん、家庭学習の時間など、自分の好きなときに他者の言葉を参照できるようになり、言語環境を整えることにつながると考えた。

イ 協働的な学びの工夫

協働での活動の際に、児童が、より多くの言葉を比較検討できるように、個人で考えた言葉とその言葉を選んだ理由を互いに出し合うよう助言した。そうすることで、単に協働で文章を作るだけでなく、より多くの言葉に触れながら、互いの語感について議論を交わしながら試行錯誤できるとともに、言葉がもつよさを認識できると考えた。

ウ デジタル語句リスト

自分が調べた語句や意味、用例等を表計算ソフトに入力し、デジタルワークシートとして蓄積できるようにした。デジタルワークシートにしたことにより、必要に応じて何度でも更新や改良が可能になったり、異なる学年でも使用することが可能になったりすると考えた。また、調べた語句に関する画像や動画等の情報を一元化することができ、記憶に残りやすくなったり、関連する事柄も学ぶことができたりするため、児童が楽しみながら自分の語彙を豊かにしていくことができると考えた。

(2) 学習意欲を高めるための工夫

ア 単元指導計画の工夫

語彙に対する学習意欲を高めるためには、単元で扱う教材提示の仕方を工夫するだけでなく、児童自身が、これまでの生活経験を振り返り、言葉のよさに気付くことが必要であると考えた。そこで、教材による学習の前に、これまでの生活経験を振り返り、使った言葉によって、物事が円滑に進んだときのことや想定通りにいかなかった経験を思い出し、話し合う

活動を行った。また、言葉に対する目標立てと目標達成に向けての具体的な行動を考える活動を行った。

イ 学習形態の工夫

学習意欲の向上を図るため、児童一人一人が自分の課題に対して、誰とどのように学ぶと更に学びが深まりそうかを考えて一緒に学習する友達を自分で選択してグループをつくり、学習できるようにした。

ウ 振り返りの工夫

「語彙に対する振り返り」と「自分の学び方に対する振り返り」の2観点での振り返りを行った。「語彙に対する振り返り」では、言葉のもつよさや言葉に対する気付き等を記入させるようにした。「自分の学び方に対する振り返り」では、本時の自分の学び方を振り返るとともに、他者の学び方で参考になりそうなことを記述するなどし、自分の学びをどうやったら深めていけるかを考えさせ、次時への意欲喚起を図った。

エ 教師の働きかけの工夫

主体的な学びが意欲を高めるという心理学の知見から、コーチングの手法である「傾聴」「承認」「質問」のスキルを用いて学びの伴走者としての働きかけを行った。また、検証授業前に、「自尊感情測定尺度（東京都版）」を用いた調査と学級担任にヒアリング調査を行い、児童一人一人の傾向を参考にして、個に応じたコーチングを心掛けるようにした。

4 検証授業及び検証授業の分析

(1) 検証授業の概要

都内公立小学校第5学年「言葉について考えよう『伝わる表現を選ぼう』」（全4時間）において検証授業を実施した。

(2) 検証授業の分析

ア 記述内容の変容

昆虫採集のお知らせを第1学年児童向けに書き換えるという学習活動では、多くの言葉の中から、伝える相手を意識して、平易な言葉で表現しようとする姿が見られた（表1）。

また、授業時の活動の様子や記述内容から、相手意識や目的意識をもちながら、適切な言葉を選択している姿を見取ることができた。

表1 記述内容の変遷

適切な容器

- ①個人：虫を入れる入れ物
- ②協働：虫とりにふさわしい入れ物
- ③（協働で考えた文や考えた言葉の共有）
- ④個人：虫かごや虫が入るケースなどの入れ物

イ 協働的な学びの効果

相手と目的を明確にして手紙（はがき）を書く言語活動では、事前に手紙を書く相手とその目的について四つの組み合わせを示し、その中から学級の全員がどれを選択したかを明らかにした上で、誰とどのように学習を進めていくかを自己選択させて行った。

校長に「〇〇に向けた決意」を伝える手紙を書くことを選択した児童が互いに声を掛け合い、主体的に協働しながら学んでいく姿が見られた。その協働での学びの中で、「時候の挨拶を入れたらよいのではないか。」「最高学年という言葉があれば、決意が伝わるのではないか

。」などの発言があり、このグループで学んでいた全員が「時候の挨拶」を入れるとともに、「最高学年」という言葉を使って決意を伝えようとしている様子が見られた（表2）。

表2 協働で学習した児童の手紙の記述内容

	時候の挨拶を入れた記述	最高学年が入った記述
A児	夏が終わり、秋の涼しさを感じる季節になりました。	学校の最高学年であることに責任をもち
B児	秋が始まり、涼しくなってきましたね。	下級生に優しく振る舞える最高学年
C児	秋も深まり肌寒くなってまいりました。	来年度、最高学年となります。
D児	秋風が吹き渡る季節となりました。	最高学年として下級生を支えて

(3) 検証授業後の質問紙調査、児童振り返り、個別面談からの考察

ア 語彙に対する学習意欲の高まり

検証授業後、児童に実施した質問紙調査（4件法）では、「言葉をたくさん覚えたいですか」という質問に対し、「思う」と回答した児童が48%、「どちらかといえば思う」と回答した児童が48%と、肯定的回答をした児童が9割を超えた（図1）。

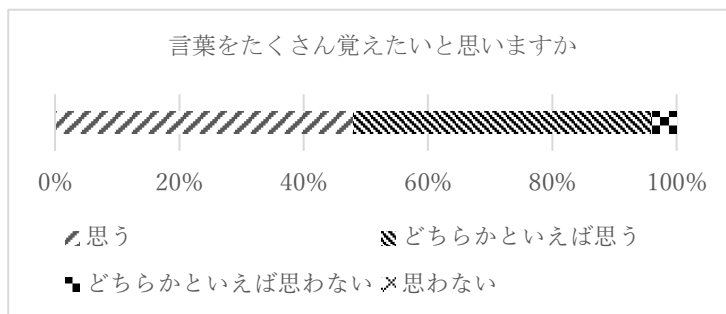


図1 検証授業後の児童質問紙調査（n=25）

また、検証授業後の児童の振り返りでは、

「今まで何気なく言葉を使っていたけれど、これからは意識して使おうと思った。」「授業を受けて、言葉についてより考えを深めることができました。」「授業を受ける前は、言葉についてあまり興味がなかったけれど、『もっと言葉について知りたい』『言葉を使いたい』と思えるようになりました。」等の記述から、語彙に対する学習意欲が高まった児童がいることが分かった。

さらに、検証授業後の個別面談では、「テレビや動画を見ていて分からない言葉が出てきたらメモをとって調べるようになった。」「語彙を増やすためのドリル学習を前よりも頻繁にやるようになった。」「前よりも友達の意見や使っている言葉を意識して聞くようになった」等のコメントがあり、主体的に語彙を豊かにしていこうとする児童もいた。

第4 研究の成果

- ・ 協働的な学びに向けて学習形態を工夫した結果、学習意欲が上昇した。
- ・ 検証授業の結果、児童の語彙学習への意欲が明らかに増加した。

第5 今後の課題

- ・ 言葉がもつよさを実感できるような学習活動を継続的に展開していく必要がある。
- ・ 学習意欲について学びを深め、児童がすすんで語彙を豊かにすることができるような手だてを更に考え、汎用性を高めていく。